

母 校 の 三 大 師 恩 (※1)中第 28 回卒 鎌 田 正 (※2)

私が母校の相中を卒業したのは、昭和 5 年 3 月、最早 70 年もの昔になるが、今にしてしみじみと思うことは、母校の師恩のありがたいことである。

母校 5 か年在学中、直接に薫陶を受けた恩師は 30 数名に及んでおり、各先生から受けた学恩は数えきれない程であるが、その中で特筆しなければならないのは、次の三大師恩である。

その第一は、校長の長谷訥造 (※3) 先生である。東大で印哲を専攻され、禅の修行を積まれたといわれただけに、訥々として語られる訓話にも、人生哲理の深いものがあった。

私が長谷校長を師恩の第一として掲げるのは、私の生涯にわたる進路に対して、決定的ともいべき重大な指示を与えられたからである。それは、母校卒業後、仙台の二高を受験して不覚にも失敗した私は、母校に対して面目ないことをした、それなら一高を受験して合格しようと思ひ、不合格判明の翌日から本格的に受験準備に着手した。その甲斐あってか、自信が持てるようになったので、先輩の助言に従い、実力試しに東京高等師範を受験したところ、幸か不幸か、合格してしまった。

しかしそれに進学する考えは毛頭なく、一高受験に必要な書類を母校に依頼すると、長谷校長から呼び出しがあった。「東京高等師範や文理科大学には、立派な学者が沢山おられるから、そこで学問するのがよいと思う。一高の受験は反対である。考え直しなさい」という校長の諭しであった。不承不承引きさがつたものの諦めきれず、その翌日も、またその翌日も、二度、三度と校長を訪ねてお願いしたが、お許しがなかった。

ただ、三度目の別れぎわに、それほどの希望ならと、やっとお許しがあった。早速書類を整えて受験の手続きを取ったところで熟考した。人格者でもあり、人生経験豊かな校長があれ程までに言われるからには何か私について考えることがあつてのことかも知れないと反省し、一高の受験は断念した。

長谷校長の指示にしたがって高師に進学してみると、校長の言われたように、碩学をもって聞こえる教授たちの講義に学問するよろこびを感得し、やがて東京文理大に進んで漢学を専攻し、爾来、漢学の研究と教育一筋に生涯を貫くことになった。恨むべし、長谷校長に謝せんとしても、その機会はなくなってしまった。

次にその第二は、漢文を担当された石川虎之助 (※4) 先生である。刻苦勉励、独学で築き上げられた先生で、流泉と号して漢詩も多く作られ、『論語』・『孟子』などは全文暗記され、漢学の学殖は深かった。あの独特の字体で黒板一杯に板書され、噛み砕くように懇切に講義されたお姿は、今も眼前に浮かんで来る。

私は長谷校長のご指示にしたがって東京高師に進学したが、同校で国語漢文科を選び、東京文理大で漢文学を専攻し、生涯この研究と教育に没頭することになったのは、紛れもなく石川先生よりの感化によるものであろう。先生にしてご在世ならばと感慨無量である。

更に語るべきその第三は、柔道を指導された笠原三弥<sup>(※5)</sup>先生である。東大法学部卒業直後のご赴任で、学生気分そのままの若さであったが、気宇廣大、悠揚として雅量に富んでおられた。私は柔道部の助手で、5年生の時は主将であったから、先生に接する機会が多く、特に道場における鍛錬は、厳しい中にも暖かさがあった。県の大会に出場して優勝を獲得し、よくやったと褒められた時は嬉しかった。

私が先生に感謝してやまないのは、道場で鍛えていただいた不撓不屈の強力なる心身である。これこそ私をして学問と教育に生涯を貫かしめた原動力である。不幸にして先生の早世されたことは、惜しみても余りある。

母校創立百周年に際し、在時を追懐して恩師の大恩に感謝すると共に、母校の隆昌発表を祈念してやまない。

(※1) 創立百周年記念誌 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉 第四部「思い出の記」より。

(※2) 旧姓 渡部、飯豊出身。

(※3) 昭和4(1929)年～昭和6(1931)年、校長。

(※4) 大正11(1922)年～昭和7(1932)年、教諭。

(※5) 昭和2(1927)年～昭和9(1934)年、教諭。